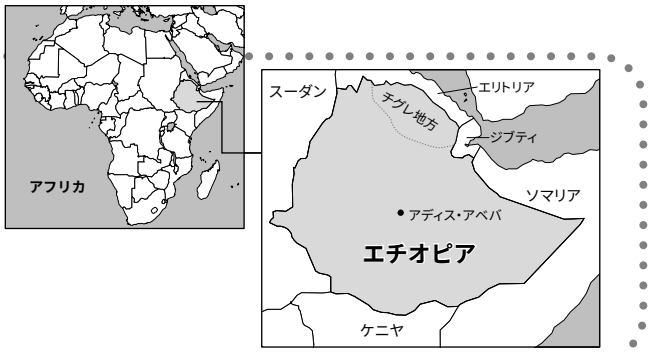
ユニセフ子ども物語
地球に生きる子どものくらし

Ethiopia

エチオピア



「地雷の恐ろしさ」を伝えるデスタアレムの願い

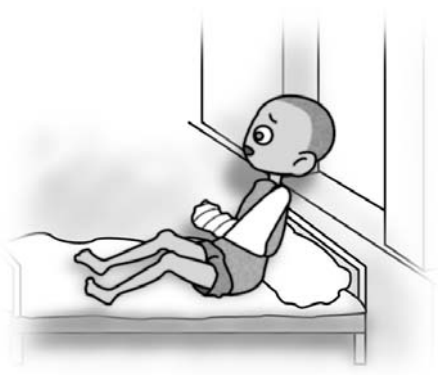
デスタアレムの故郷の村

エチオピアとエリトリアの戦争が終わった後、デスタアレムは家族と一緒にふるさとの村に戻って来ました。家は戦争でこわれてしまったので、両親とお兄さんたちは家を建て直すのに大忙しです。家ができるまでは仮の家で暮らします。

村では戦争の間に埋められた地雷が取り除かれていましたが、村のまわりに広がっている野原には、まだ、たくさんの地雷が埋まっています。地雷を取り除く専門の人たちが、地雷を探しては取り除く作業を続けています。デスタアレムはその作業にとても興味があって専門の人たちが起爆装置を取りはずすのを見たりしたこともありました。

地雷が爆発！

ある日、友だちと野原で遊んでいたデスタアレムは丸い地雷を見つけ、自分で起爆装置をはずそうとしたその瞬間大きな音とともに地雷は爆発し、デスタアレムは驚きのあまり駆け出しました。一緒にいた友だちが「デスタアレム！手が真っ赤だよ！」と叫ぶので、手を見てみると血だらけです。驚いて逃げている間、痛みを感じなかったので、手をけがしたことに気がつかなかったのです。



友だちは急いで血だらけの手をTシャツで巻いて、村の保健センターへデスタアレムを連れて行きました。デスタアレムは二本の指を失いました。でも手当てが早かったので腕は切断しなくてすみました。デスタアレムはとても大きなショックを受け、外に出るのがこわくて家から出ることができなくなりました。大好きだった学校も事故にあった日から休んで、ずっとベッドに横たわったまま過ごしています。

地雷教育の授業

友だちから毎日学校のようすや授業の内容を聞くうちに、デスタアレムは学校がなつかしくなってきました。デスタアレムの夢は学校の先生になることなのです。先生になるためには、学校に通って勉強をしなければなりません。

ユニセフの人と学校の先生から「君の体験を学校で多くの友だちに伝えてほしい。君のつらい体験を話すことで、地雷の被害にあう友だちを減らすことができるんだよ」という話を聞いて、デスタアレムは学校に行く決心をしました。

久しぶりに外に出るのはとてもこわかったのですが、友だちが朝、家まで迎えにきてくれました。先生もクラスのみんなもデスタアレムを応援してくれるので、以前のように勉強するのが楽しくなりました。

地雷教育の授業では「地雷を見つけたら絶対にさわらないこと。必ず専門の人に伝えて処理してもらうこと」と、自分の体験を学校の友だちに伝えています。野原からすべての地雷が取り除かれるまで、友だちが自分のような悲しくてつらい思いをしないようにとデスタアレムは願っています。

（文・構成：日本ユニセフ協会）

エチオピアの子どもたちを地雷から守る

地雷のむごさが人びとに及ぼすこと

対人地雷は子どもや女性でも、兵士と見さかいなく被害を与えます。戦争が終わっても設置されてしまった地雷をふめば爆発するのでいつまでも被害はなくなりません。

地雷がしかけられている土地は耕すことができず食糧不足となったり、道路は使えず救援物資が届けられなかったり、難民となった人びとが安全に故郷に帰ることができなかったりします。地雷があるかもしれない恐怖は人びとの日常生活に大きな影響を与えます。

主な対人地雷（レプリカ）©日本ユニセフ協会

地雷の爆発にあった約半分の人が亡くなります。手足が吹き飛ばされたり、目が見えなくなったりして、もとの体にはもどることはできません。対人地雷は約300種類もあり、約2kg程度の重さがかかっただけで爆発する地雷もあります。地面に浅く埋めたり、ワイヤーにつまずくと爆発するものもあり、1970年代に開発されたプラスチック製の地雷は金属とは違い探知することはほとんど不可能です。

エチオピアの地雷問題

過去何十年と、断続的な紛争が続いた結果、数多くの地雷や不発弾がエチオピアに埋まっています。特に1998年5月から2年に及ぶエリトリアとの国境紛争中に埋められた地雷は現在も大きな脅威となっています。戦火を逃れ、国内避難民となったチグレ地方の約33万人の人びとが、故郷へ戻り始めた2000年から地雷や不発弾による事故が急増しているのです。事故の被害者の70%以上が子どもたちです。

ユニセフが進める地雷教育

ユニセフはチグレ地方での地雷教育を現地のNGOや地方・地域レベルの組織とともに、1999年10月から実施しています。国内避難民の故郷への帰還が始まった2000年からは、地雷の被害にあった子どもが学校でほかの子どもたちに地雷の危険性を伝える「チャイルド・トゥ・チャイルド・アプローチ」と、地域が主体となって地雷教育を行う取り組みが本格化しました。

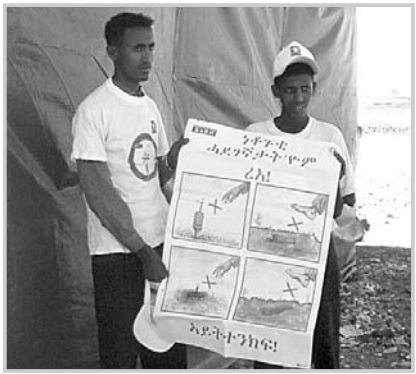
ラジオ放送や地域での集会などの場で、女性や青年の組織の協力を得ながら地雷教育が行われます。さまざまな人びとが協力することで、個人と地域の地雷に関する知識が高まり、地雷から身を守る方法が普及していくのです。

地方政府や地域の組織では、３カ月に一度、地雷や不発弾による事故にあったすべての人の年齢・性別・場所などに関する報告をまとめ、その報告書にもとづいて、地雷教育の進め方や地雷除去の計画が検討されます。

地雷教育を行う地元ＮＧＯの活動を視察して

（財）日本ユニセフ協会は、2002年2月にチグレ地方で地雷教育を行っている地元NGOのRaDO（Rehabilitation and Development Organization)の活動を視察しました。

RaDOは、地雷から子どもたちを守るため、地域の小学校を回って事故を防ぐために必要な知識を広めています。メッセージを伝えるのは主に10代のボランティア。実際に地雷事故で手の指を失った若者も活動に参加しています。「危険区域には入らない」「地雷や不発弾を見たら絶対に手を触れない」「見つけた場所は先生に伝える」など、集まった子どもたちに布製ポスターを使って分かりやすく説明します。


地雷教育用布製ポスター　©日本ユニセフ協会

同世代からのメッセージに子どもたちの目は真剣です。

子どもたちの自主的な活動も活発で、

活動するボランティアたち　©日本ユニセフ協会

アジアタスファ小学校の子どもたちは「地雷クラブ」をつくり、石や棒をうまく利用した劇や、詩の朗読などを通じて、他の子どもたちや地域住民に地雷の危険性を伝えています。

こうした地雷事故を防ぐための活動は、チグレ地方北部の8割の小学校に広まり、地雷事故の被害者が2年前に比べて約7割減少するなど、大きな成果をあげています。

詩の朗読　©日本ユニセフ協会